突棒、指股、鎹等を飾置り、是往古關のありし時の遺風ならん、

市谷

〔新編江戸志八〕市谷

求涼雜記云、往古は市買と書、按るに、往古此所市の立し所ならんか、今尾州侯御やしきにては、都て市買と書く、又或說に、長延寺谷と云谷あるゆへ、市谷といふ、

〔御府內備考五十八市谷〕市ケ谷は古之地名と見へて、江戸古地圖に市谷村をのす、又北條分限帳に、太田新六郎江戸市谷三十二貫九百十六文の地を領せしといふ、又同じき人江戸中里市ケ谷にて、二十貫六百十六文の所を知行せしよしも見ゆ、是によれば、市谷は中里までにつゞきしやうに見ゆ、○中略正保改の鄕帳には、市ケ谷高四十三石餘、田方拾五石餘、畑方貳拾八石餘、御代官所と記たり、今市ケ谷と稱するの地域、南は御堀に限り、東北は牛込に續き、西は四ッ谷に隣りて、皆武家屋鋪町並等の地となり、在方分と稱するは、纔にその間に雜り殘りたれど、それも多くは抱地等になれり、

牛込

〔南向茶話〕問曰、牛込小日向筋御聞承及も候哉、

答曰、○中略牛込の名目は、風土記に相見へ不申候へ共、舊き名と被存候、凡て當國は、往古曠野の地なれば、駒込、馬込、目黑邊何れも牧之名にて、込は和字にて、多く集る意也、

〔御府內備考五十三牛込〕中古上野國大胡之住人大胡彥太郎重治といひし人、當國にうつり、年時を詳にせず此豐島郡牛込村にすみ、小田原の北條に屬せり、その子宮內少輔重行、天文十二癸卯年の秋、七十八歲にして卒す、その子宮內少輔勝行が時に至り、天文廿四乙卯年弘治元年なり五月六日、北條氏康に、告て大胡をあらためて牛込氏となれり、此時氏康より判物を賜ひ江戸の內牛込村、今井村今赤坂にあり、櫻田村、日尾屋村今日比谷なりを領せり、他國の領地は略せり勝行天正十五丁亥年七月廿五日卒す、とし八十五歲牛込系圖又北條分限帳を見るに、江戸牛込六十四貫四百三十文之地を、大胡某領せしよしのす、